

小柴先生の御退官によせて

折戸周治（物理学教室）

小柴昌俊先生は本年3月定年退官されることになりました。

先生が本郷にいらしてからもう24年にもなりません。先生がまだスリムな長身でフォルクスワーゲンを乗り回していらした頃でありまして、この間の時の流れを想いますと誠に感慨深いものがございます。

小柴先生は昭和26年東京大学理学部物理学科を御卒業後、東京大学及びロチェスター大学大学院を経て学位を取得され、ロチェスター大学、シカ

ゴ大学研究員、東京大学原子核研究所助教授を経て38年に本学部に着任されました。先生は宇宙線、素粒子の分野にわたって先駆的、独創的な研究を行ってこられました。なかでも宇宙線の超新星起源の指摘、原子核乾板による宇宙線相互作用の研究などが有名であります。

また素粒子物理の分野においては49年当時に電子・陽電子衝突実験の将来性を鋭く見抜かれ、理学部附属高エネルギー物理学実験施設の設定に尽力され、これによって国際協同実験DASPによ

る新粒子 P_c の発見及びタウレプトンの確立，更にJADE実験によるグルーオンの発見，統一ゲージ理論の検証等の成果を可能にされました。この業績によって60年にドイツ国大功劳十字賞を授与されました。

近年は素粒子物理国際センター長としてOPAL実験を発足させると共に，陽子崩壊，更にはニュートリノ天文学等の先鋭的な研究を行われつつあります。

また先生は多くの研究者の育成に貢献されまし

た。先生の教育は知識や技術の伝授というよりは先生に接して一緒にやっているうちに，先生の企画力，行動力，気迫，といったものから，知らず知らずのうちに研究に必要なものを会得して行くといった，いにしへの剣術修業の趣が強かったように思われます。

先生の大胆な発想がますます冴えわたりつつある今，理学部を退官されるのはまことに惜しいことです。今後の一層のご活躍をお祈りし，究極の旧人類，小柴先生を送る言葉といたします。